第 6 章　両生類・爬虫類

石田　淳

両生類、爬虫類

１　調査概況

（１）調査対象および調査対象地域

本調査では両生類および爬虫類を調査対象とし、佐伯市内全域を調査対象地域としました。

（２）調査期間

2009 年から 2011 年の間で、現地調査および文献調査、聞き取り調査を行いました。また、2000 年から 2008 年までの筆者による確認記録も、今回の調査データとして使用しました。

（３）調査方法

文献から収集した情報と、2000 年から 2008 年までの確認記録を基にして調査地域をある程度設定し、確認したい生物の生態を考慮した上で、現地調査の実施時期、実施時間、調査地点または調査ルートなどを決定しました。

現地調査では、採集、目視、鳴き声などによって確認した種を記録し、可能な限り写真撮影を行いました。また、周辺住民に対しての聞き取り調査も現地調査と同時に行いました。

今回の文章中で使用した種名は、日本爬虫両棲類学会が公表している日本爬虫両生類標準和名に従っています。

（４）保全すべきものの選定基準・価値区分

2006 年に環境省がインターネット上で発表したレッドリストの中で、佐伯市内でこれまでに記録のある両生類、爬虫類は全部で 10 種あり、絶滅危惧ＩＢ類にアカウミガメ・タイマイが、絶滅危惧Ⅱ類にアオウミガメ・エラブウミヘビ・ヒロオウミヘビ・オオイタサンショウウオ・オオダイガハラサンショウウオが、準絶滅危惧にアカハライモリが、情報不足にニホンイシガメ・ニホンスッポンがそれぞれ選定されています。

大分県がインターネット上で公表している「レッドデータブックおおいた 2011」では、絶滅危惧ＩＡ類にアカウミガメが、絶滅危惧ＩＢ類にタイマイが、絶滅危惧Ⅱ類にタカチホヘビ・シロマダラ・タワヤモリ・アオウミガメ・オオイタサンショウウオ・オオダイガハラサンショウウオ・トノサマガエルが、準絶滅危惧にニホンイシガメ・ブチサンショウウオ・ニホンヒキガエルが、情報不足にニホンスッポン（「レッドデータブックおおいた 2011」ではスッポンと表記）が選定されています。

また、大分県ではオオイタサンショウウオを「佐伯城山のオオイタサンショウウオ」として生息地域を限定した天然記念物に指定しています。オオダイガハラサンショウウオも大分県の天然記念物として指定されてはいますが、「奥祖母のオオダイガハラサンショウウオ」としての指定なため、佐伯市内のものは天然記念物の指定からは外れています。

２　両生類、爬虫類の概況

面積が広く多様な自然環境を持つ佐伯市では、多くの両生類、爬虫類が生息しています。大分県内で確認されているもののうち、県北のみに分布するカスミサンショウウオと、宇佐市の院内でのみ確認されているオオサンショウウオ以外は、すべての種について記録があります。黒潮の影響を受けるため、時折、南方系のウミヘビ類が確認されているのは、大きな特徴のひとつです。

３　調査結果

佐伯市内で確認された両生類・爬虫類を地域で分けて説明しても、それほど大きな差がないため、ここではより細かな環境ごとに説明していきます。

（１）住宅地周辺

住宅地周辺で最もよく見かける爬虫類というと、まず最初に思い浮かべるのは「トカゲ」ではないでしょうか。一般的に「トカゲ」と呼ばれているものは２種類いて、ニホントカゲとニホンカナヘビを区別することなく「トカゲ」と呼んでいることが多いようです。

コンクリート吹付け斜面で日光浴をする
ニホントカゲ

林縁部に現われたニホンカナヘビ

尾の青いニホントカゲの幼体

この２種は、よく見れば簡単に見分けることができます。ニホントカゲは体表につやがあるのに対して、ニホンカナヘビはかさついた感じがし、体型はニホンカナヘビのほうがよりスマートです。

尻尾が青く、体に明瞭な縞模様のあるトカゲを見たことがある人も多いと思いますが、それはニホントカゲの幼体です。ニホンカナヘビの尻尾は、青くなることはありません。

生息場所はどちらも住宅地周辺だけでなく、農耕地や林縁部などでも見られます。ただし、ニホンカナヘビが草むらも好むのに対して、ニホントカゲはそういった場所ではあまり見かけません。

窓辺に現れたニホンヤモリ

夜間、明りのあるところではニホンヤモリをよく見ます。ニホンヤモリは住宅地周辺で見られるのですが、自然環境が豊かなところではほとんど確認されていないことから、海外から古い時代に持ち込まれた帰化動物ではないかと言われています。

ヘビの仲間ではアオダイショウ・シマヘビ・ヤマカガシが農村部で見られます。これらのうちアオダイショウは、人家のネズミを狙って家の中にまで入り込むことがあるそうです。

雨が降りそうになると、人家の庭先にある木の上から、ニホンアマガエルの鳴き声が聞こえてくることがあります。ニホンアマガエルは、指先に吸盤が発達していて、草の上や樹上などで生活をしています。塀などで仕切られたところでも容易に移動でき、また、ちょっとした水溜りがあれば繁殖できるため、市街地であってもまだまだ生息していけるようです。夜間、明りに集まってくる虫を求めて、自動販売機に張り付いている姿もよく見かけます。

以前であれば、ニホンヒキガエルもよく見られたようですが、平地では少なくなりつつあります。地上性であるため市街化が進むと移

庭木の葉の上で乾燥に耐えるニホンアマガエル

動が難しくなり、また、繁殖に利用していた水辺が市街地では埋め立てられたりしたため、少なくなってしまったようです。

（２）森林

暖かい季節、雨の日の夜に森の中を歩くとたくさんの両生類・爬虫類に会うことができます。

最もよく出会うのはタゴガエルです。市内全域、森の中であれば普通に生息しています。未舗装の林道を歩いていると、道の端に溜まっている落ち葉のあたりから、飛びはねて逃げていく様子をよく見かけます。

林道の落ち葉の上にいたタゴガエル

３月以降になると、渓流近くにある斜面の、湧き水が染み出しているところから、タゴガエルの鳴き声が聞こえてきます。タゴガエルは地下水中で産卵をするため、オスは岩の下などに隠れたまま鳴いていて、その姿を見かけることはほとんどありません。

地下水中で生み出された卵は、ふ化後、卵黄の栄養のみでエサを取らずに成長していきます。

開放水面にあったタゴガエルの卵とオタマジャクシ。ほかのカエルに比べ孵化したてのオタマジャクシの体色は白っぽい。

タゴガエルがひっそりと繁殖するのに対し、見た目がよく似ていて、同じような場所で見かける機会の多いニホンアカガエルとヤマアカガエルは、人目に付きやすい開けたところで産卵をします。

繁殖期はどちらも２月前後です。産卵は、池や湿地などの流れのないところで行われ、場所によっては同じときに同じ場所で産卵をしていることもあります。以前であれば、田んぼでの産卵もよく見られたようですが、最近では乾田化の影響で、２月頃に水の残っている田んぼも減り、産卵できる場所も少なくなってしまいました。

雨の日の夜に林道に現れたヤマアカガエル

ニホンアカガエルとヤマアカガエルは、環境の変化によって人間の生活圏から少しずつ姿を消しつつあるカエルたちです。

この２種は繁殖期以外はともに森林内で暮らし、生息地も重なるところがありますが、ヤマアカガエルのほうがより山地に生息しています。

産卵地で鳴くヤマアカガエル

メスをめぐって争うニホンアカガエルのオス

番匠川の河川敷にできた水溜りで産卵をするヤマアカガエルとニホンアカガエル。手前の３匹がヤマアカガエルでそれ以外の５匹がニホンアカガエル。

森の中で暮らしているカエルはまだまだいます。

ニホンヒキガエルは、平地でこそ、その姿を見かける機会は減ってしまいましたが、夜間、森の中をのしのしと歩いている姿は依然としてよく見かけます。

シュレーゲルアオガエルとカジカガエルは、指先に吸盤が発達していて普段は樹上でくらす森のカエルです。

川からかなり離れたところに現れたカジカガエル

アケビの葉につかまるシュレーゲルアオガエル

産卵地でメスを待つオスのオオイタサンショウウオ

これまでに佐伯市内では、オオイタサンショウウオ・オオダイガハラサンショウウオ・ブチサンショウウオの３種のサンショウウオが記録されています。

どのサンショウウオも、幼生のときは水の中ですごし、成長するとエラ呼吸から肺呼吸に変わって陸上に上がり、森の中で生活するようになります。

成体を見つけることは大変難しく、繁殖期に水辺に集まってきたとき以外には、ほとんど見かける機会はありません。

オオイタサンショウウオは、名前のとおり大分県を中心に分布するサンショウウオです。

オオイタサンショウウオの卵塊

オオダイガハラサンショウウオの幼生

本匠の岩場にいたタワヤモリ

本匠産のシロマダラ

1931 年に城山産の標本をもとに新種として発表され、1966 年に「佐伯城山のオオイタサンショウウオ」として、大分県の天然記念物に指定されました。

市内では林縁部にある小さな池や水溜り、林床内にできた湿地などでの産卵を確認しています。

オオダイガハラサンショウウオとブチサンショウウオは、山地の源流付近で産卵をするサンショウウオで、市内では宇目での記録があります。

近年になって分類学的研究が進み、これまでブチサンショウウオとされていたものが、ブチサンショウウオとコガタブチサンショウウオの２種に分けらたのですが、今回の調査ではブチサンショウウオの仲間を確認することができなかったこともあり、市内で確認されているものがどちらの種なのかは、はっきりしませんでした。

宇目で夜間調査をしたときには、小さな沢で指先に黒い爪のあるオオダイガハラサンショウウオの幼生をたくさん見つけました。夜行性で、昼間は石の下などに隠れていて、夜になると出てきて活動をするようです。

夜行性のタワヤモリは、九州では今のところ大分県と宮崎県でしか確認されていません。沿岸部の岩場を主な生息場所とし、人為的環境周辺に生息するニホンヤモリとは異なり、住宅地周辺ではほとんど見かけません。やや内陸部であっても岩場があれば生息していて、弥生や本匠でも記録があります。

シロマダラとタカチホヘビは、ともに森林で暮らすヘビの仲間です。どちらも夜行性であるためか確認記録がそれほど多くありません。

今回の調査ではシロマダラを上浦と本匠で、タカチホヘビを弥生で確認しました。

雨の日に弥生地区の林道に現われたタカチホヘビ

アルビノのタカチホヘビ

シロマダラは、特徴的な黒い横帯があるのでほかのヘビとは簡単に見分けがつきます。

タカチホヘビは、ほかのヘビと比べて眼が小さく、背中の中央に一本の縦線があります。地中性で乾燥に弱く、雨の日に出てくることが多いようです。2005 年には佐伯市青山でアルビノのタカチホヘビが見つかっています。

ジムグリは基本的に日中に活動する森林性のヘビで、林床で見られ地中に潜ることも多いようです。

以前、番匠川上流の調査をしていたときに、岸辺の岩の上にいるジムグリを見つけたことがありました。

写真を撮ろうと思い近づいていくと、そのジムグリは川の中に入り対岸へと逃げようとしました。

逃げられたと思ったのですが、そのジムグリをその後も見ていると、対岸に泳ぎきる前に、急流にまかれてどんどんと下流に流されていきます。完全に溺れているようです。かなり流されていったあと、何とか流れの緩やかなところで対岸にたどり着きましたが、そのまま岩の上でじっとしています。

その溺れたジムグリに近づいて再度撮影を試みると、疲れきっていたためか、まったく逃げることなく、簡単に撮影することができました。

溺れたジムグリ

（３）川、池、水田

多くの両生類は、幼生の時代を水中ですごします。そのため、卵は水辺で産む必要があり、普段陸上で暮らしている成体は、繁殖期になると、産卵のために水辺へとやってきます。

２月頃、小さな川の流れがほとんどない「とろ」の部分に、多くのニホンヒキガエルが毎年集まってきて、産卵をしています。

産卵の最盛期には、１匹のメスをめぐるオスたちの争奪戦が、河川敷内のいたるところで繰り広げられます。その争いは激しく、ときには争いに巻き込まれてメスが圧死のような状態で、死んでしまうこともあります。

産卵の期間は短くて、たいていの場合は１週間ほどで終わってしまいます。

３月に入ると、山あいの湿地などからシュレーゲルアオガエルのきれいな鳴き声が聞こえ始めます。

シュレーゲルアオガエルは、繁殖期以外、森の中で暮らしていて、あまり見かけることはありません。しかし、産卵の時期になると、森の近くの湿地や水田など、方々から鳴き声が聞こえてきて、市内の広い範囲に生息していることがわかります。

一見するとニホンアマガエルと似ているため、一般的にこの２種はあまり区別されていないようです。

見分け方としては、シュレーゲルアオガエルのほうがニホンアマガエルよりも大きくなること、ニホンアマガエルは鼻先から目の後ろにかけて黒い模様が入ること、ニホンアマガエルのほうが鼻先の傾斜がきついこと、といった違いで見分けられます。

川の浅瀬でメスを待つニホンヒキガエルのオス

産卵中のニホンヒキガエルのペア

湿地に現われたシュレーゲルアオガエル

シュレーゲルアオガエルの卵塊

シュレーゲルアオガエルは、水中ではなく湿地の土手や田んぼの畦などに穴を掘って、土の中に泡状の卵塊を産み付けます。泡の中で孵化をした幼生は、雨などによって水辺へと流れ出していき、水中で生活を始めます。

シュレーゲルアオガエルが田んぼで産卵をする場合には、田植えの前からその行動が見られるのですが、田んぼに水が入りだすと、さらに多くの種類のカエルたちが産卵のために水田へと集まりだします。

どこの水田に行っても見られるのは、ニホンアマガエルとヌマガエルです。ヌマガエルは水辺に暮らすカエルで、体型はずんぐりとしていて、背中の中央に細い線のあるものとないものがいます。

この２種は、圃場整備によって環境が変化し、他のカエルが見られなくなった水田であっても、市内であれば普通に見かけます。

それとは逆に、水田の環境の変化によって、大変少なくなってしまったのがトノサマガエルです。トノサマガエルもヌマガエル同様、水辺周辺に住んでいるカエルです。

ニホンアマガエルやヌマガエルと比べて非常にジャンプ力が高く、たとえ姿が見えなくても、その跳躍力の差から、水の中に飛び込んだときの音で、トノサマガエルだとすぐにわかります。

今回の調査では、より自然度の高い水田でしか確認できませんでした。その確認地点のほとんどが山間部の水田で、番匠川水系下流域の平野部では絶滅状態に近く、平野部で確認できたのはわずか２箇所のみです。

水田ではたくさんのカエルが見られますが、そうしたカエルたちを求めてやってくるのが、シマヘビやヤマカガシ・ヒ

背中に線があるタイプのヌマガエル

直川の水田にいたトノサマガエル

バカリ・ニホンマムシといった、ヘビたちです。

この中でもシマヘビとヤマカガシは、市内のいたるところで、もっとも普通に見かけるヘビの仲間です。

シマヘビの体色にはいろいろと変化があり、体に４本の線が入るものもいれば、全身が黒いものがいたり、またはその中間の模様のものもいたりして、実に変化に富んでいます。

とくに体色の黒いものを、市内では「ウシヘビ」と呼んで区別しています。全国的に見ればヘビの黒化したものを「カラスヘビ」と呼ぶことが多いのにたいして、このあたりでいう「カラスヘビ」はヤマカガシのことを指しています。

なぜ黒いヘビを「ウシヘビ」と呼ぶのかについては、ずっと疑問に思っていたのですが、昔の牛はすべて和牛で黒かったからじゃないのか、という話を聞いて、なんとなく納得してしまいました。

ヤマカガシは水辺を好むヘビで、水田や河川、湿地などで多く見かけます。

おとなしいヘビですが、実は２種類の毒を持っています。

１つは強い刺激を与えると頭の後ろあたりから染み出す毒で、目に入ると炎症を起こします。

もう１つは、咬まれると危険な、上あごの奥から出てくる毒です。毒性は強く死亡例もありますが、深く咬まれない限りは毒が注入されることはほとんどありません。むやみに捕まえようとしない限りは、ヤマカガシのほうから逃げていくので、見つけても必要以上に慌てる必要はありません。

ヒバカリは、ヤマカガシと見た目が似た

水田に現われたシマヘビ

繁殖期に咬みつきあって争う４本線のシマヘビと黒化型のシマヘビ（ともにオス）

水面を泳ぎながら逃げていくヤマカガシ

感じのヘビですが、毒は持っておらず、大変おとなしいヘビです。森林近くの水田、湿地などに生息しています。市内ではそれほど出会う頻度は高くありません。

ニホンマムシは毒蛇として一般的によく知られた存在で、見かけると捕らえられて殺されてしまうことも多いようです。しかし、性格はおとなしく、よっぽどのことがなければヘビのほうから攻撃してくることはありません。

水田、森林、草むらなどに出没しますが、市内ではシマヘビやヤマカガシ、アオダイショウほど頻繁に見かけることはありません。

水辺で見かける機会の多いアカハライモリも、実は皮膚から毒を出します。両生類の仲間は皮膚から毒を出すものが少なからず存在していて、ニホンヒキガエルやニホンアマガエルも皮膚から毒を出します。

これらの生き物は子供たちの良き遊び相手です。毒を出すからといって、子供たちを生き物から遠ざけるのではなく、生き物を触ったあとに手を洗うという習慣を身につけさせてしまえば、何の問題もありません。

アカハライモリは池や湿地などの流れのない水域で見られ、市内の広い範囲に分布しています。以前は水田でもよく見かけましたが、最近では圃場整備による環境の変化によって、見かける機会も少なくなりました。基本的には水辺で暮らしていますが、生息地周辺では、雨の降った日の夜に水辺を離れ、路上を移動している姿を見かけることもあります。

幼生時には、首の両側に羽状の外鰓（がいさい）と呼ばれる呼吸器官があり、これを使って水の中で呼吸をしています。この

水田近くの森で見つけたヒバカリ

夜間、水田脇の路上に現われたニホンマムシ

水辺を歩くアカハライモリ

外鰓はサンショウウオの幼生でも見ることができ、「ウーパールーパー」として売られているアホロートルにもこの外鰓があります。

ツチガエルは、市内の平地から山間部にある、池、水田、渓流など、さまざまな環境に生息するカエルです。水辺からあまり離れることはなく、この種に関しても、トノサマガエルやアカハライモリ同様、田んぼの乾田化の影響から、水田で見かける機会が減ってしまいました。

アカハライモリの幼生

カジカガエルは川で見られる代表的なカエルです。普段は森の中で暮らしていますが、繁殖期になると川へとやってきます。オスは河川内にある転石の上になわばりを作り、きれいな声で盛んに鳴き続け、メスがやってきてペアになると、水中にある岩の下に産卵をします。

産卵は、上流域から中流域の転石が点在する平瀬などで行い、夏になると、岸辺の石の下に隠れている上陸間近の幼生をよく見かけます。

ハスの葉の上にいたツチガエル

女島周辺の池や水路などには、外来種であるウシガエルが生息しています。ウシガエルは、外来生物法により特定外来生物に指定されているため、「捕まえて生きたまま持ち帰る」、「他の場所に移植する」、といった行為は禁止されていて、もし違反をした場合には、非常に重い罰則が科せられます。

市内では生息に適した環境が少ないためか、今のところ確認地点は限られていますが、今後もその動向を十分に注視していく必要があります。

水面に浮かぶウシガエル

石の下に生みつけられたカジカガエルの卵塊

カジカガエルの幼生

佐伯市内では、これまでに４種の淡水性のカメの仲間が確認されています。

番匠川水系では上流域から中流域にニホンイシガメが、下流域にはニホンスッポンとクサガメが生息しています。

ニホンイシガメは、自然環境のよく残るところで見られ、天気のいい日には岩の上で日光浴をしている姿を見かけることもあります。

クサガメは、主に流れの緩やかな河川の下流域に生息し、水田などでも時折見かけます。基本的には昼行性ですが、夜間に活動することもあるようで、夜間調査をしているときに見かけることもあります。

最近の研究によると、日本産のクサガメは、古い時代に海外から持ち込まれた外来種なのではないかと言われています。

ニホンスッポンは流れの緩やかな下流域で見られ、河川周辺のハス田に生息しているものもいます。番匠川では過去に放流された記録もあります。

平地の池では、ミシシッピアカミミガメが生息しているところがあります。本種はもともと日本に生息していたものではなく、ペット用に海外から持ち込まれたものが遺棄され繁殖したものです。

河川敷に現われたニホンイシガメ

水田内で泳ぐクサガメ。水は濁っているが、クサガメの特徴である背甲の３本の隆起した線がはっきりとわかる。

日光浴をするミシシッピアカミミガメ

夜間路上を移動していたニホンスッポン

（４）海と島

佐伯市内にはいくつもの島がありますが、今回は深島・沖黒島・大島と３つの島で調査を実施しました。

島という狭い環境の中では、生息できる生物の量にも限りがあり、どの島でも確認できた種数は多くはありませんでした。

深島で確認できた両生類・爬虫類は全部で５種。林縁部ではニホンカナヘビとニホントカゲが多く見られ、シマヘビも２個体確認できました。

夜間にはニホンアマガエルの鳴き声が森の中から聞こえ、街灯に集まる虫を求めてか、居住地周辺には300個体を超えるニホンヒキガエルが現われました。

夜間調査で森林内の調査も行いましたが、ニホンヒキガエルは居住地周辺でしか確認できず、まるで島内に生息しているすべての個体が、人家の周りに集まっているかのような光景でした。

沖黒島で確認できたのはニホンカナヘビとアオダイショウの２種のみです。ニホンカナヘビは林縁部に多く、アオダイショウは島

夜間、深島の居住地に集まってきたニホンヒキガエル

沖黒島のアオダイショウ

の頂上付近、林床部で１個体確認できました。

「米水津村誌」によればタワヤモリも確認されているようです。

大島で確認できたのはニホントカゲとニホンアマガエルのみです。ニホントカゲは居住地周辺で確認し、ニホンアマガエルは、放置された船や捨てられた風呂桶の中に溜まった水の中で、幼生と上陸したての幼体を確認しました。また、林内から聞こえてくる鳴き声も確認できました。海岸部の岩場の隙間で、ヤモリの仲間の卵を見つけましたが、どの種のものかはわかりませんでした。

大島の陸上に放置された船の中にいた、ニホンアマガエルの幼生と、まだ尾の残る上陸したての幼体

島内での聞き取りでは、シマヘビとアオダイショウがいるとの情報があり、「鶴見町誌」によるとジムグリとタワヤモリの記録もあります。

市内では海生の爬虫類のうち、ウミガメとウミヘビの仲間を合わせて全部で６種の記録があります。

ウミガメの仲間は、アオウミガメ・アカウミガメ・タイマイの３種が、市内周辺海域で確認されています。アオウミガメとアカウミガメは市内での確認記録が多く、タイマイはやや少ないようです。アオウミガメとタイマイは周辺海域に回遊してくるだけですが、アカウミガメは、例年、市内の海岸で産卵をしているようです。

番匠川河口の砂地に産み落とされたアカウミガメの卵

2009 年７月には、番匠川河口の砂地でアカウミガメの産卵が確認されました。たまたま河川内に迷い込んでしまったカメが、そのまま産卵をしてしまったようです。

ウミヘビの仲間では、エラブウミヘビ・ヒロオウミヘビ・セグロウミヘビの記録があります。

エラブウミヘビとヒロオウミヘビは、南西諸島の沿岸域に生息します。おそらく市内で確認されているものは、黒潮に乗って偶然たどり着いたものではないかと思われます。

蒲江の海岸に漂着したアオウミガメ

セグロウミヘビは外洋性のウミヘビで、日本近海に広く分布しています。

４　両生類・爬虫類を守っていくためには

市内で確認されている両生類・爬虫類 38 種のうち、環境省のレッドリストや県のレッドデータブックに記載されているものは全部で 16 種、全体の 40%以上にものぼります。

両生類はその生活史の中で水中と陸上という、２つの異なる環境を必要とします。幼生のときにはエラ呼吸をして水中でくらしますが、成長にともなって肺呼吸や皮膚呼吸へと変化し、陸上に生活の場を移していきます。

単一の環境では、すべての生活史を完結することはできません。その個体、または個体群を維持していくためには、水中と陸上、それと、その両方をつなぐ推移帯（エコトーン）の存在が必要不可欠です。

両生類を保護しようとする場合、その活動が目に付きやすい環境だけを維持することだけに力が注がれがちです。

例えば、産卵場所や幼生の生活の場となる水域は、人目につきやすく保全の対象となることが多いのですが、成体が生活する陸域の保全が同時に行われることは稀です。

ある一部の環境だけを守り、それだけで、その場所を利用する生物の保全をしたつもりになってしまうということは、自己満足以外の何ものでもありません。

このことは、減少してしまった生物を、人為的環境下で保護増殖し自然環境下に放すという行為に関しても、まったく同じことが言えます。

減少してしまった要因を取り除くことなく新たに生物を放しても、見た目上は増えたように見えるかもしれませんが、その状態ではその個体群が維持されているとは言えません。それは単に人為的環境下で増やされた生物が、野外にいるという状態なだけであって、それ以上の意味はまったくありません。

全国的によく行われている、ゲンジボタルの幼生の放流などは、そのよい例でしょう。

減少しつつある両生類を守っていくためには、各成長段階に必要となる、すべての環境を維持していく必要があります。

もうひとつ、生物の保全上重要となるのは、他地域から持ち込まれる生物の問題です。ミシシッピアカミミガメやウシガエルが市内にも生息していますが、これらはともに海外から持ち込まれたものです。

ミシシッピアカミミガメは、その幼体が「ミドリガメ」という商品名で販売され、容易に入手できることから、ペットとして広く普及しています。

野外で見られるミシシッピアカミミガメは、ペットとして飼育されていたものが捨てられて繁殖したものです。もともといなかったものが自然環境下に持ち込まれれば、少なからず影響を与えます。飼育者の、生物を遺棄するという無責任な行動が、自然破壊につながっているということを、もう少し理解すべきでしょう。

また番匠川では、ニホンスッポンが放流されたという記録があります。たとえ漁業上重要な種であっても、今後は、遺伝的多様性の保全という立場から、より計画的な放流が求められています。

５　参考、引用文献

荒尾一樹・石田淳．2005．大分県で採集されたタカチホヘビのアルビノ個体．爬虫両棲類学会報，2005，２，120-121．

佐藤眞一・堀江道廣．2000．大分県における両生類の調査・研究史．両生類，5，1-11．

松橋利光・奥山風太郎．2002．山渓ハンディ図鑑９日本のカエル＋サンショウウオ類．山と渓谷社．

松橋利光・富田京一．2007．山渓ハンディ図鑑 10 日本のカメ・トカゲ・ヘビ．山と渓谷社．

松井正文・関慎太郎．2008．カエル・サンショウウオ・イモリのオタマジャクシハンドブック．文一総合出版．

宇目町誌編纂委員会．1991．宇目町誌．宇目町

米水津村誌編さん委員会．1990．米水津村誌．米水津村

鶴見町誌編さん委員会．2000．鶴見町誌．鶴見町

蒲江町誌編さん委員会．2005．蒲江町史．大分県南海部郡蒲江町

直川村誌編さん委員会．1997．直川村誌．直川村